

さには何となく気づきながら、この種のパーソナリティ障害への対応の仕方を身に付けていなかったと言えます。しかし、これらの経験から、一度目、二度目の安易な対応が却ってK氏に手助けになっていなかった事実もわかりましたし、米国のカンバーグらのいう構造化した診断面接によって初めてパーソナリティ障害が見い出される事実を皮肉にも読書でなく体験として知り得ることになりました。

数回で始末を付けてしまう患者は、私達の日常臨床としても少なくないと思います。治療者としては、つい充分手助けしたと思考がちですが、意外と本日報告したパーソナリティ障害が背景にあって、他医受診という場合も少なくないと思います。このような再々通院や転院のジプシー患者化を防ぐ意味でもパーソナリティ障害としてのボーダーラインの治療について技法を研究することを痛感しましたので本日発表いたしました。

## 2) A 型行動パターンの症例研究

小林 慎一・幸村 尚史 (新潟大学)  
佐藤 哲哉 (精神科)

近年、虚血性心疾患(以下 IHD)に関する研究において、その心理社会的側面、つまり心身症としての側面に大きな関心が集まりつつある。この IHD の心身症的側面に関する研究は、これまでのところ二つの観点から行われている。その一つは、Friedman と Rosenman によって見い出された A 型行動パターン(以下 Type A) と IHD との関係についてである。この行動パターンは、周知の通り競争心が強く、性急でイライラしやすい、攻撃衝動が強いなどをその特徴とする。WCG Study, Framingham study, French-Belgian Cooperative Study などにより、この Type A が高血圧、高脂血症、喫煙とは独立したしかもそれらと同様、若しくはそれ以上に重要な risk factor であることが prospective に確認されている。Type A が IHD を引き起こすメカニズムとしては、Type A が自ら stress を背負いやすく、しかも Type A はそのようなストレスにたいして交感神経優位の生体反応を生じやすいことが関連しているとされている。

IHD の心身症研究の第二の観点は、IHD 発症に関連する心理社会的なストレスの問題である。先の Framingham study では work overload や昇進, marital dissatisfaction, aging worries などが IHD の発症に関連していることが明らかにされている。しかし、これらの研究では、このような situational stress が

Type A にとってどのような心理的意味をもっているのかについては触れられていない。今回我々は中年男性 3 例の IHD 患者を精神医学的に面接する機会を得た。本研究ではそこで得られた所見に基づきながら Type A の個人にとって IHD 発症を促進する心理状況がどのようなものであるか、その特異性を明らかにし、それが IHD の心身症研究に果たしうる意義について次のように述べた。

(1) 3 例の病前性格には明瞭に Type A の特徴が認められた。しかも彼らの病前の生活には高い野心、競争心、熱中性を持ちながらも、人一倍懸命に努力することで他者に対して常に優位性を保ち続けるという構造が見られた。

(2) 彼らの IHD 発症は中年期特有の社会心理的状況の中で他者に対して優位に立ち続けることがもはや不可能な状況や、他者に対して優位に立ち続けることが逆に反感を買い孤立してしまう状況に陥った時生じていた。これらの状況は、彼らの病前の在り方では十分に解決することが困難なものであるが、彼らはこれに対し病前の解決法を採り、懸命な努力を続けていた。このような焦燥した身体的努力が IHD の発症に結び付いていた。症例の発症状況には中年期の発達課題にともなう心理的危機が大きな役割を果たしていると考えられた。

(3) この様な症例分析より、Type A の IHD 発症に対する病因的意義は男性においては中年期に最も大きくなる可能性を指摘し、これについて文献的考察を行った。

## 4) 成人前の親との死別体験をもつ患者の人格構造

—臨床像とロールシャッハ特徴—

七里 佳代・茂野 良一 (新潟大学精神科)

三浦まゆみ・橘 玲子 (新潟大学保健管理センター)

依存対象の喪失が人間の精神発達に及ぼす影響については、ボウルビィ、メラニー・クラインらによっても論じられている。今回我々は 20 才以前に実の親のいずれか一方、又は両方との死別体験を持った患者について、継続治療とロールシャッハ・テスト施行の機会を得たので、対象喪失が与える人格構造上の特徴について報告し考察を加えてみたい。

対象患者は男性 6 例、女性 9 例の計 15 例であり、S62. 10 月現在の年齢は 34 才～59 才、親との死別年齢は 2 才～19 才である。治療期間は 2 M～26 M であり、初診時の診断はうつ病 6 例、不安神経症 5 例、ヒステリー 3 例、

離人神経症1例であり、15例中8例までが、内科からの紹介患者であった。

ロールシャッハ・テストの結果から、内面的精神活動のエネルギーの低さ、要求水準の高さ、現実適応力の高さ、常識性の保持が示唆された一方で、より自己中心的で欲動優位な傾向を持ち、内面的な欲動に振り回されて外界刺激との適切な距離のとれなくなる側面がみだされた。すなわち、のびやかさを欠き、思考の幅が狭く、高く社会化された人格の上層を持ちつつも、人格の一部にコントロールされにくい欲動を抱えているという二重構造が考えられた。ロールシャッハ・テスト上にあらわれた防衛機制では、まずうつ病と診断された例では抑圧もしくは抑圧不全を基調としており、敵意や依存欲求が反動形成されていた。次に不安神経症では分離を用いて感情閉鎖を試み、そこに合理づけを作っていた。更に、うつ病、不安神経症、ヒステリーと診断された中で、身体症状を伴うものでは投影の機制が用いられる傾向が認められた。

これらの結果をまとめてみると、

1. 現実適応力は有する
2. 依存欲求をめぐり ambivalent である
3. 攻撃感情にまつわる衝動が control されにくい
4. 抑圧・反動形成が主防衛

である。

内面的な深まりを欠いた状態で、高い要求水準のもとに、いわば仮性適応してきた本症例群の姿が浮かびあがってくるものと思われる。ライフサイクルの中での中年期以降の発症との関連や、うつ病群、正常群との比較などにつき、今後症例数を重ね、尚詳細な検討を行ってゆきたいと考えている。

## 5) ロールシャッハテストからみた

### 強迫神経症

#### 一性格とその防衛機制について一

星 敬子・出江 一枝 (新潟大学精神科)  
中村 協子・七里 佳代  
橋 玲子 (新潟大学保健管理センター)

今日まで、強迫神経症者のロールシャッハテストに関しては、Rorschach, Schafer, 馬場, 成田らによる報告をみただけでその数は比較的少ない。そこで、今回、我々はロールシャッハテストの量的分析と防衛機制から強迫神経症者の人格特徴を検討したいと思う。

対象者は、昭和44年から昭和62年までの間に当大学精神科と松浜病院外来を受診し、強迫神経症もしくはその

疑いがありとされてロールシャッハテストを実施した72名(男子44名, 女子28名)、年齢は14歳から67歳までである。

まず、ロールシャッハ反応の体験型に基づいて対象者を第Ⅰ群から第Ⅳ群に分類した。第Ⅰ群は人間運動反応と色彩反応共に多い両向型、第Ⅱ群は人間運動反応優位の内向型、第Ⅲ群は色彩反応優位の外向型、第Ⅳ群は人間運動反応と色彩反応共に乏しい両貧型である。次に、72名全員の治療経過をカルテにより調べ、その結果強迫神経症と確定された24名を本研究の対象とした。対象者のうち第Ⅲ群が11名と最も多くみられた。

以下、24名のロールシャッハテストによる量的分析について述べる。

まず、最も出現率の高かった第Ⅲ群の特徴は、外界の刺激に引きずられやすく情緒面で不安定であるが、常識に頼り、対人関係を避けることで安定を得ようとしていることである。これまで強迫神経症者には人間運動反応優位の者が多いといわれていたが、馬場らが指摘したように、我々のデータにおいても色彩反応優位の強迫神経症者が多くみられた。

次に、第Ⅰ群においては、第Ⅲ群と共通する部分が多くみられたが、第Ⅲ群と異なる点は、より葛藤的ということである。

第Ⅱ群においては、内部の衝動と外界の刺激を過剰に統制し、完全主義という従来指摘されていた強迫性格者の特徴が窺われる。

最後に第Ⅳ群においては、刺激そのものを避け、対象との関わりは受身的、表面的といえる。従って、この群は他の群に比べて未分化で未熟な人格構造のように思われる。

次に、各群の防衛機制の違いについて検討する。

第Ⅲ群においては、分離—合理づけが圧倒的に多く、その他、抑圧—合理づけがみられた。このことより、外界の刺激に引はられ混乱するが、その混乱した感情を分離という防衛で安定させようとし、さらに合理づけで強化をはかることが窺われる。

次、第Ⅱ群においては、分離—投影が特徴的で、これは観念優位で現実を主観的に解釈しやすい内向型の特性から考えれば了解できる。

第Ⅰ群においては、分離—合理づけ、分離—反動形成、投影が特徴的で、このタイプは第Ⅱ群と第Ⅲ群の特徴を合わせ持っている。

最後に、第Ⅳ群においては、抑圧不全が目立つ。これは反応拒否という形で出てくるものであり、従って、特